

Title	二〇〇四年度修士論文要旨；二〇〇四年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.1/2 (2005. 9) ,p.199- 215
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0199">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0199</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔日本史学専攻〕

八世紀における宮都造営の体制と特質

—日唐の官司比較を通じて—

十川 陽一

宮都の造営は、これまで個別官司の検討という形の研究は比較的多かったが、それらを体系的に把握する試みはあまりなされてこなかった。本修士論文では、八世紀の日本における宮都造営体制の復原とその特質を考察するにあたり、日唐の官司比較を軸に検討を行った。

そこでまず唐制で宮殿造営を掌った将作監について、諸史料から検討を加えた。その結果、将作監は令に規定され、造営のみならず資材調達・労働力管理も担当した官司である事が確認された。また将作監は、主都である長安に加え、副都洛陽の宮殿・官衙や宗廟・郊祀の壇など、単独の官司で幅広い対象の造営・修理を担当したことが明らかとなった。

日本の律令官制において、唐将作監を継受したと考えられている官司は木工寮である。木工寮は木作の他、木工支配・資材調達の行政手続きなどを担当し、この点において唐将作監と職

掌が共通しており、継受関係を指摘できる。またこの他木工支配の中核として、諸造営官司に木工を外向させることも多々あった。この様に木工寮は八世紀の造営事業に欠くべからざる存在であったと考えられるが、唐制との最大の差異は、宮殿造営には造宮省をはじめとする令外官司が設置され、令制官司である木工寮が主体的な役割を担っていないという点を指摘できる。

そこで八世紀の宮都造営に主体的な役割を果たした造宮省について検討を加えた。結果造宮省は唐将作監と異なり、首都の宮殿造営に限定した職掌を持っていたことが確認された。かかる差異は、唐において長安・洛陽が不可分の存在であったのに対し、日本では天皇の所在する主都が唯一絶対の首都であったという、首都性の違いを反映したものと考えられる。そこで造宮卿に任官する人物の傾向に目を向けると、天皇との人格的結合が多く見出せることが確認された。これに加えて、造宮省を補うように設置された官司は、天皇家との人格的結合を背景に設置・補任が行われている事も明らかとなった。

この様に日本の宮都造営においては、令に規定される官司よりも、天皇との人格的結合を背景に設置される令外官司こそが重要であったと考えられる。加えて唐令では宮殿造営に関する具体的規定が存するが、日本令では同様の規定は見られない。こうした点から八世紀の日本における造宮は、天皇と密接に関わって行われていたものと考えられるとの結論に到った。すなわち八世紀段階の宮都には、天皇の「私的」空間としての性格も残存していたものとみられる。

## 日本古代国家の対外意識

廣田 亨

現代社会において国家と社会のあり方を決定的に規定する要因は外交である。人間や文物、情報の活発な往来は国家と国家、社会と社会の間の距離をますます近いものにしていく。また、環境問題や南北問題、人口問題等に代表されるように国際社会全体で解決しなければならぬ問題も多い。およそ国家と国家、社会と社会の間の交流のあるところには摩擦が生じるものである。そして、それらの間の摩擦を和らげ、相互理解を可能にするものは対話である。歴史の研究が現代社会に強く訴えかける力を持つためには、現代の社会状況を冷静に見極め、そこから過去への問いを見出し、歴史の扉を開かなければならない。したがって、国家と国家、社会と社会の間の境界が曖昧になりつつある現代において国民国家成立以前の時代の外交、そして対外意識を検討することは極めて切実な課題であると言える。日本古代国家が自国を取り巻く異国や異域とどのように向き合っている、それらをどのように認識していたのかということが現代においてこそ問われなければならないのである。

李成市氏の研究に導かれつつ日本古代外交史の先行研究を顧みる時、私達はそこに一定の傾向性を見出すことができる。邪馬台国から倭の五王へ、遣隋使から遣唐使へ、遣唐使の廃止か

ら国風文化の成立へといった解釈の図式は私達にとって馴染み深いものである。しかし、そのような解釈の図式に欧米諸国との条約改正交渉の中で他律的な日本から自律的な日本への転換を志向した近代日本の対外意識が刻印されていることに私達は無自覚である。私達歴史学徒は自分達の思考を強力に拘束している近現代という枠組みを自覚しない限り、過去と対話することはできないのである。私達の課題は史料の読解を通して現代とは全く質の異なる国家・社会が過去において存在したことを認識し、そこから現代の国家・社会を相対化し、長期的な視点から国家・社会のあり方を冷静に考察することである。六国史等をはじめとする日本古代史の史料から遣唐使中心史観や国風文化成立史観を引き出すことができないことは多言を要さないところである。日本古代国家にとって重要な外交交渉の相手であったのは決して隋や唐だけではない。高句麗、百濟、新羅、渤海や蝦夷、隼人、南嶋人、そして漂流民もまた大切な外交交渉の相手であったのである。それは六国史等の史料が蕃客の来朝や夷狄の征討等を詳細に記述していることから明白である。

私の立場は贈答品や交易品といった文物のやり取りを分析するという視角から日本古代国家の対外意識を考察するというものである。その考察にあたって私は異国・異域と日本の間を往來する贈答品・交易品がどのように呼ばれ、どのような内容で構成され、どこで誰によって点検され、どこに分配・奉納されたのかという点に注目している。東野治之氏は日本と唐や新羅、渤海等との間の文化的な交流の諸相を明らかにし、新川登亀男

氏は贈答品の内容から新羅の中国に対する意識と日本に対する意識の間の格差を指摘し、保科富士男氏は贈答品の呼称から日本古代国家の対外意識を考察している。しかし、文物の動きを分析するという視角から日本と異国・異域との間の政治的な関係を本格的に論じた研究はまだなされていないというのが実状である。また、石母田正氏は日本古代国家の対外意識を隣国Ⅱ中国、蕃国Ⅱ朝鮮諸国・渤海、夷狄Ⅱ蝦夷・隼人・南嶋人と整理したが、この解釈の図式は歴史学界に多大な影響を与えている。しかし、同氏自身が指摘しているようにそのような中華意識が機能した時間と空間は極めて限られたものであったと言わなければならない。日本古代国家は異国・異域から日本に贈られた贈答品の呼称、日本が異国・異域に贈った贈答品の内容の点では隣国、蕃国、夷狄を区別しているが、それら以外の点ではそういった区別はしていないのである。日本古代国家の対外意識は決して中華意識のみで説明できるものではなく、一定の広がりを持っていたのであり、そこに私達は日本古代外交史の多様な可能性を見出すことができるのである。

〔東洋史学専攻〕

### 殷墟卜辞から見た商代土地利用

進藤倫太郎

甲骨文字の発見以来、急速に進展した商代史研究の中で、地理研究に関しては停滞してしまっているといえる。現在の研究においてとられる方法としては、甲骨文中の一地名を時代の大きく下る文献史料と比較させるか、同様の方法で複数の地名を挙げ、それらを含む範囲を想定するかという二種が主に見られる。しかし、これらの方法による地名の解釈においては、研究者間の統一的な解釈が成されておらず、商代地理の実態を捉えることができていない。

本稿では、このような問題点を指摘し、従来の見解とは大きく異なった結論を導いた松丸道雄氏の研究方法に依拠し、地名の検討を行った。さらに個別にしか研究されてこなかった地理研究において、複数の行為におけるそれぞれの地名を比較させ、その関係について考察するという新たな視点での地理研究を試みた。

第一章では、田獵・農業・牧畜という商代において、重要であったと考えられる三つの生産活動及び行為に関する研究史を整理し、それぞれの研究の持つ問題点を指摘した。次に第二章においては、対象とした三つの行為についての甲骨文に見られ

る地名を、各研究史において検討されてきた地名としての認定条件を踏まえた上で、疑問の残る地名もあわせて検討を加え、それぞれに列挙した。第三章において、松丸氏の結論を敷衍し、それらの地が商王朝の直接支配の範囲にあるものと考えた上で、実施対象地として重複するものであるのか否かを検討した。さらに後の時代についてみられる、山林藪沢の開拓による新たな農地の獲得という文献の記録を参考とした上で、甲骨文字の整理による、三つの行為が同一地において行われていない、あるいは二つの行為においても、地名数に比して重複する数が非常に少ないという結果から、商代の土地というものが行為によって使い分けられていたという結論を導き出した。

本稿では、甲骨文中の地名の整理による行為実施地の非重複という点を指摘するに留まったが、その他の行為を行う地との比較や地名と人名との関係から王朝の構成を検討する、あるいは農業や牧畜の必要とする土地の規模の検討から商王朝の広がりを導くといった研究をさらなる目的とするものである。本稿の結論は、そのような目的に対しての第一段階であり、今後の研究課題につなげていくものとした。

### 植民地朝鮮における皇民化教育

—初等教育を中心に—

北 綾乃

日本の朝鮮植民地支配において、日中戦争以降に行われた皇民化政策では、「内鮮一体」がスローガンとして強調された。その目的である「皇国臣民化」のために教育の果たした役割は非常に重大である。日本の朝鮮植民地支配の問題性を考えると、この皇民化教育の理念と具体的な教育実践を明らかにすることには大きな意義がある。本論では皇民化教育の実態を明らかにするため、特に朝鮮総督府の政策に対して学校や教師達がどのような学校経営方針を樹立し、教育実践を行ったかに焦点をあてて考察した。

日中戦争開戦後、「兵站基地としての使命を全うする」課題を抱えた朝鮮総督府は、朝鮮人を「天皇に身を捧げて働く」人間にするべく皇民化政策を展開した。初等教育の拡充が図られるとともに教育令が改正され、皇民化の方針が明確に打ち出される。

このような総督府の方針に対し、学校では行事教育が重要視され、児童は入学直後から日本的儀礼を体得させられる。また初等教育の大きな役割のひとつが日本語普及拡大であり、学校でも朝鮮語が実質的に禁止され、新入生に対しても日本語のみ

での生活を要求し、意図的に一年生の担任は日本人が配置されるようになる。

太平洋戦争突入と戦局の悪化に伴い、学校は支配者の勤労要請に応えるための動員機関としての役割を果すようになった。

戦時末期になると、初期の皇民化教育において目指された皇国臣民としての理想像はもはや語られず、児童に対する露骨な戦争協力が求められるようになる。そしてそのような動員は、朝鮮人に対して、より強く要請された。

またある戦時末期の国民学校教員の日記から、皇民化された朝鮮人青年としての内面を考察した。皇民化教育を内面化した青年は支配者の恩惑通りの皇国臣民に仕立て上げられ、植民地教育政策の忠実な遂行者として児童の皇国臣民化に尽力したのであった。そして極めて私的な日記にさえ、模範的な皇国臣民としての文章を記していたのである。

### マルコムXの中東・アフリカ旅行

川口 泰貴

近年になって、アメリカ国内のムスリムが様々な形で問題になってきた。だが、これまでアメリカ国内のムスリムとその歴史に関してはなかなか注目されることがなかった。

マルコムX（一九二五—一九六五年）は、アメリカのムスリムの中でも最も象徴的な人物の一人である。マルコムXの、一九

六四年四月十三日から五月二十一日までの中東・アフリカ旅行は、ムスリムとしての彼の人生の集大成であるとともに、アメリカのムスリムにとって非常に重要な意味をもつものであった。メッカ巡礼は、ムスリムの義務として行うものであるが、当時のアメリカ人にとっては大変な苦勞が伴うことであった。また、アフリカ旅行は、かつて黒人の祖先が住み、イスラームを信仰していた土地に戻ることを意味していた。

本稿では、マルコムXとアメリカのムスリムを取り巻く状況を把握するため、アメリカのムスリムの問題点を取り上げるとともに、マルコムXの改宗のきっかけとなり後に対立関係となった、ネイション・オブ・イスラムの特徴とその変容について把握した後、マルコムXの中東・アフリカ旅行の詳細について明らかにすることで、アメリカのムスリムにとってマルコムXの中東・アフリカ旅行とは、どのような意義をもつものなのかを検討した。その結果、中東・アフリカ旅行が、マルコムXの思想の変化をもたらしたことが明らかにしたが、白人と黒人との分離思想からイスラーム本来の人類平等をめざす思想への変化、教義の変化といった正統派への移行や、アフリカ諸国の首脳や様々なムスリムとその組織とのネットワークを築くなど、大きな役割を果たした。

こうした点は、アメリカのムスリムの活動の方向性を示すとともに、アメリカというイスラームにとっては異質ともいえる地域においてイスラーム世界との一体性や、これまでイスラームが拡大してきた歴史と共通するものが浮かび上がってくる。

他方、アメリカ国内のムスリム研究には、残された課題が山積みとなっており、今回の論文を手がかりに一つ一つ明らかにしていきたいと考えている。

### 一九三〇年代前半の和解交渉から見る

#### アラウイー・イルシャーデー論争の諸相

山口 元樹

アラウイー・イルシャーデー論争とは、二〇世紀初めに、シンガポールやジャワといった東南アジアのハドラミーたち(南アラビアのハドラマウト地方出身者とその子孫)の間で起こった、サイイド(預言者ムハンマドの子孫)の地位をめぐる論争のことである。ハドラマウトでは、アラウイーと呼ばれる一族が、サイイドであることによって社会において伝統的に高い地位にあった。しかし、東南アジアのハドラミー・コミュニティの中では、彼らのそのような地位が、イスラームの理念である平等に反すると主張する者たちが現れるようになった。そして、彼らが中心となって、一九一四年に、「改革と導きのためのアラブ人協会(イルシャード)」が設立された。これをきっかけにして、アラウイーたちとイルシャーデーたち(イルシャードの支持者)の間において論争が始まった。

先行研究は、この論争が本質的には東南アジアのハドラミー・コミュニティの内部における争いであることを強調

調し、サイイドの地位に関する議論については、表層的なものとして論じてきた。しかし、この論争は、その発端からハドラミー以外のムスリムが重要な役割を担っており、彼らが問題としていたサイイドの地位に関する議論もやはり重視するべきである。そこで、本稿では、論争において行われた議論の内容をサイイドの地位に関係するか否かで分類し、そこからこの論争の「ムスリム全般に関わる問題」と「ハドラミーに限定された問題」という二つの面を示した。そして、このような視座に基づいて、一九三〇年代前半に行われたこの論争の和解のための一連の試みを考察した。それらの和解の試みは、ハドラミーたちのみではなく中東の有力者たちも論争に介入していることと、同時期に新たな問題が議論されるようになったことから注目し値する。

〔西洋史学専攻〕

#### 歴史のなかの身体

—十八世紀フランスにおける言説と規律化—

辻坂 学

われわれは、どのような身体を生きているのだろうか。ある身体は、ひとりの人間の存在と不可分なものであり、ひとりひとりの身体には、個別の歴史性が宿っている。そう考えるなら

ば、身体の時代的集合表象という試みは不可能といえる。しかし、現代に生きるわれわれが、過去に生きた身体の多様なあり方を垣間見るとき、現代では決して見られない時代や文化の特性を濃厚に帯びた身体の多様なあり方が浮かびあがってくる。

本論文では、過去に生きた身体の多様なあり方とその歴史的変遷をたどることにより、現代に生きる身体の時代的特性を把握するための手がかりが得られるのではと考えた。

そこで、まず、第一章では、「自然と社会が内在しあっていた時代とその文化」として、人間が、自分のからだと自分のからだをとりまく環境との有機的つながりを鋭敏に感じとっていた時代に生きたからだについて考察した。このような世界観のもとで生きるからだは、大宇宙（マクロコスモス）と照応関係にある小宇宙（ミクロコスモス）であり、たとえば、病むことは大宇宙とのあいだに保たれていた調和の喪失を意味した。しかし、十四世紀以降、アリストテレスの著作のヨーロッパへの流入による自然主義の勃興に呼応して発達していった解剖学は、小宇宙としてのからだと大宇宙とのつながりを断ち切っていくことになった。

第二章「操作できる自然・身体―言説」、第三章「操作できる自然・身体―文化」では、われわれの生きる身体を、操作主義的な自然観・身体観と強くむすびついた「近代的身体」と捉え、その歴史的形成過程について、言説と施策の二つの面から考察した。十八世紀フランスでは、啓蒙主義的知識人のあいだでの人口減少論の流行を契機として、人口を知ることへの政治

的関心が高まるなかで、人間の生と死の統計的把握が統治のための不可欠な知識となっていく。また、一七六〇年以降、王権の援助のもと、デュ・クードレ夫人によって全国各地でおこなわれた助産技術講習会は、国家が、国民のからだを生み出す場の改革という政治的意図をもって、それまで非政治的世界であった出産の場へ介入していく契機となった。そして、革命期におこなわれた、衛生学校における医学教育と医学研究の改革と進展は、革命という歴史的文脈のなかで、「市民＝患者」という身体への新しいまなざしの成立のもとに進められた。

現代に生きるわれわれの身体も、十八世紀に形成されはじめた、身体の政治・経済的活用を可能とする知の枠組みのもとにあると考えられる。近代社会の編成原理が問われている現代においては、そのような知の枠組みの形成過程をより詳細に検討することにより、それとは異なる身体のあり方が模索されている。

### リシュリユー「宰相制(ministériat)」についての考察

大川 理恵

日本で「宰相」と訳されている *premier ministre* は最高国務会議の司会、および出席者間の調整を行う者を指し、「宰相」的役割は付与されていない。しかし、主にリシュリユーとマザランに関して「宰相制」的現象が生じたことは事実として残る。

本稿で着目したのが、リシユリユーやマザランが多くの官職と称号を得ていたという事実である。行政、軍事そして聖職というあらゆる方面の高位の職を得ることで、それぞれの領域における影響力を確保した。職や称号は王の寵の表明であり、多く獲得することで伝統的大貴族や抵抗勢力に対して相対的優位に立ちえたのである。これらの職は威厳と一定の地域における影響力を有しており、伝統的大貴族に対抗するための二つの要素を有していた。まず一つは宮廷での位階を上昇させる要素である。影響力を行使できる領域の広さは宮廷における位階の基準の一つでもあった。そして、統治機構が整備されつつあった過程にあるなかで、権限が明確ではない職が多くあった。たとえば、王族、同輩公、枢機卿あるいはファヴォリの中から王が選んだ最高國務会議構成員は、実力や現時点で得ている地位に応じて、王に助言を行い、彼らに情報や人が集まってきた。それは王が認め、権限があるとみなしている状況であった。このことは国王の書記の立場から発展し、特定の分野における発言権や権限をもつようになった國務卿にもいえる。

リシユリユーは職と称号を多く兼ねるだけでなく、パトロナージユを形成することで権力の基盤を固めた。リシユリユーは同輩公 *duc et pairs* の称号を獲得することではじめて王の恩恵獲得競争に加わり、権力の基盤としてのパトロナージユを形成した。同輩公の称号は、貴族にとつては、国政にかかわるための優先権を獲得し、大貴族の一員となる手段であり、王権にとつては、忠実で有能な貴族を影響力のある地位につける手段で

あった。大貴族は均質の性格を有する者によって構成される一集団ではなく、伝統的な大貴族と王権によって生み出された新大貴族が混在していた。大貴族間の対立関係の隙をぬって、リシユリユーは親族と忠臣を中心としたパトロナージユを形成した。パトロナージユを形成することは「大貴族らしい生活」の一環もあった。この時代の他のパトロナージユ同様、リシユリユーのパトロナージユも感情と官職・年金を媒介にした自由な忠誠関係に基いて形成された。リシユリユーは既存の体制を維持し、利用することによって権力の基盤を築いたのである。

〔民族学考古学専攻〕

### 頁岩産出地帯における原産地遺跡の検討

—東山系石刃石器群を対象として—

田中 亮

旧石器時代研究において、石器として利用された石材の産出地付近に位置する遺跡は「原産地遺跡」として一九七〇年代の後半から、研究の対象とされてきた。当初は「原産地遺跡」の実態解明に主眼が置かれていたのだが、「原産地遺跡」とその周辺に位置する「消費地遺跡」の調査事例の蓄積を受けて、一九九〇年代からは「原産地遺跡」を中心とした一定の地域内、もしくはより広範囲な空間スケールが検討対象となった。資料

的制約の大きい旧石器時代研究において、「原産地遺跡」、「消費地遺跡」を視野に入れた最近の石器石材研究は当時の社会に迫る上で有効な方法論の一つであると考えられる。しかし、日本列島の旧石器時代には様々な側面で地域性があるのもまた事実である。そのため、ある地域で有効な分析概念が他の地域でも有効であるとは限らない。

そこで本論では、東北地方に位置する東山系石刃石器群とされる七遺跡九文化層を対象として「原産地遺跡」、「消費地遺跡」の分析概念としての有効性を検討することを目的とした。

分析の方法として前提として従来からの定義に従って対象遺跡を「原産地遺跡」、「消費地遺跡」とに分けた上で、個々の遺跡ごとに石器組成、石器製作工程に注目して検討を行った。

分析の結果、以下の点を指摘した。①石器組成から見た場合、二次加工のある石器は「消費地遺跡」で高い割合を示したが、剥片・碎片は必ずしも「原産地遺跡」で高い出土割合を示すという傾向は認められなかった、②石器の製作工程からは「原産地遺跡」、「消費地遺跡」と分類を行うことによって、明確に分類を行うことはできなかった。

以上のような結果から、筆者は少なくとも当該地域においては「原産地遺跡」、「消費地遺跡」として遺跡を分けてしまうことには問題があると考えて、新たに「原石搬入型遺跡」、「石核ブランク・石刃搬入型遺跡」、「石刃搬入型遺跡」を設定した。これは東北地方の旧石器時代に一般的に認められる石刃製作がどの工程から行われているのかに注目した類型化である。当時の

集団はある特定の場で石器の素材となる石刃を集中的に生産し、その場で石器を使った活動を行う一方で移動した先での石器の使用を予測して、石刃の作出が可能な状態の石核ブランクや石刃を携帯して遊動生活を営んでいた可能性が高いものと考えられる。今後はより詳細な石器集中部ごと、遺跡も含めた周辺地域の地形学的情報、今回検討した頁岩系とは異なる石材を使用している地域の様相といった視点を考慮に入れた検討が必要なものと考えている。

### 関東地方における古墳の受容と展開

—古墳時代前期の例を中心として—

竹内 稔人

古墳時代研究は、古くから近畿地方を中心に展開してきた。古墳の成立・展開には、政治的背景が存在したと考えられ、近畿地方を中央、他地域を地方とする図式が成り立っている。このことは、前方後円墳における墳丘・埋葬施設・外表施設などの画一性の指摘により、ますます裏付けられることになり、古墳時代研究の根底に流れている。

しかし、画一性の一方で、地域性の存在も指摘されている。但し、これら地域性は「中央」が与えたものか、それとも地方の独自によるものか。また、弥生墓にみられる地域性との違いは何なのか。これらは、その背景を考える上で重要な問題であ

るにも関らず、必ずしも明らかにされていない。

そのため、本論では、関東地方前期古墳の埋葬頭位にみられる地域性を取り上げ、上の問題に迫ることを目的とした。埋葬頭位は、既に西日本各地で地域性が指摘され、墳丘形態や規模、埋葬施設との密接な関係、時期的な変化が明らかにされている。当時後進的で受容的とされる関東地方でこうした分析することは、地域性の意味を捉えやすいと考えた。

そのため、まず従来時期決定の根拠が示されてこなかった、関東地方前期古墳の編年の再検討を行った。そしてそれを基に、墳丘形態ごとの時期的変化を分析した。その結果、時期的変化の有無、墳丘形態ごとの頭位の指向が、北西地域（上野）と南東地域（上総・下総）で異なることが明らかとなった。また、土器配置・玉類の副葬なども、それに対応している。

埋葬頭位は、埋葬施設と対応関係にある近畿地方との比較を通し、関東地方各地域が独自にその方位を決めたものと考えられる。だとすれば、土器配置・玉類の副葬などの地域性もまた、一方的な受容ではなく、各地域独自のものである。古墳にみられる地域性の多くは、地域独自のものと考えられ、今後の古墳研究もこの点を十分考慮し、政治的・社会的背景を明らかにしていく必要があると考える。

### ユカタン半島石灰岩地帯の水資源利用

—古代マヤのチュルトウン遺構を中心として—

佐々木 毅

メキシコ東部に位置しカリブ海に面しているユカタン半島は、その地盤が主に第三紀の石灰岩によって構成されている。そのため地表面に河川などの水資源が乏しく、約半年続く乾期には地下水源へアクセスできる洞窟やセノーテとよばれる泉が重要な水資源となる。その中で、ユカタン半島北西部に位置するプウク丘陵地域では、地表面から地下水系までの深さは七〇メートルを超えているためセノーテは存在せず洞窟もほとんどみられない。

この地域には古代マヤの遺跡、特に古典期終末期の遺跡が多数点在しているが、その特徴のひとつとして「チュルトウン」とよばれる漆喰で内部を固められたフラスコ状の空間を地表下にもつ貯水遺構が多数みられる。

この遺構を形態と遺跡内分布という二つの視点から分析を試みた結果、以下の結論が導き出された。まずその形態は地下に掘り下げていく「掘り下げ型」と、あまり深く掘り下げず石材によって積み上げて構成されている部分が中心の「積み上げ型」に分けられる。その差異はユカタン半島の石灰岩特有のキヤップロック構造が要因になっていると考えられ、地表面には

硬質石灰岩層が、その下層にサスカブと呼ばれる軟質の石灰岩層があり、硬質石灰岩層が薄い場所は軟質石灰岩層まで掘り下げることが、厚い場所では掘り下げられずに積み上げ型で構成されている傾向にあった。

また、遺跡内分布からは古典期から古典期末期にかけて、チュルトウンは「宮殿」等の遺構がみられるエリート層と結びつけられる中心地域のみ分布していたが、広範囲にひろがって行く傾向がみられ、それがプウク地域からさらに周辺地域へと拡散していく。しかし、後古典期になってプウクの諸センターが放棄されていくのと同時にそれ以外のセンターでもチュルトウンは構築されなくなる。こうした傾向はプウク丘陵地域の開発史として、この遺構が古典期末期の社会にどのようなように受け入れられ、放棄されたという地域における適応戦略の一端と捉えることができる。

### イスラエル王国期における石製小型「祭壇」の再検討

— いわゆる「角の祭壇」の表象をめぐって —

落合 友子

古代イスラエル王国のあったパレスチナからは、上面の四隅に突起をもつ石製「遺物」がしばしば出土している。これは聖書記述中の「角」のある祭壇と類似しているため、「角の祭壇」と呼ばれている。この「祭壇」はイスラエル王国期（鉄器

時代二期）に特徴的な宗教遺物とされており、この時代の宗教世界を理解するうえで重要なものである。だがこれまでの研究は聖書記述と対照させるにとどまるものがほとんどで、遺物そのものについての検討は少なかった。

四隅の突起である「角」は、これまで漠然と神聖な石柱（マツェバー）、動物の角などの表象であると論じられてきたが、本稿では遺物そのものの分析という側面からこのような「角」の解釈を検討しなおし、古代イスラエルの宗教に対する理解を深めることを目的とした。

イスラエル王国期の石製小型「祭壇」全般の型式分類を行った結果、明らかになったのは主に次のことである。一つ目には、最初期である前一〇世紀には形態にほとんど差がみられないこと。二つ目は、時代が下るに従い型式が末広がり派生していくこと。三つ目は、時代が新しいものほど要素の欠落、粗雑なつくり、歪んだ形状を示していることである。また特に前七世紀には聖所とは考えがたい遺構から出土していることも指摘できる。以上の結果から筆者は、初期には意味を持って一定の形状で作られたものが形骸化し、形状の多様化が起こったと考察した。よって、表象を考える際には初期の遺物に着目する必要があるといえる。

このような結果をもとに前一〇世紀の「祭壇」を見ると、四隅の「角」はこれまで一般に解釈されてきたような動物の角、石柱の表象とは考えがたく、むしろ「祭壇」全体が砦の塔を模しており、「角」は四隅を強調した屋根飾りであったと理解す

るほうが妥当であるという結論に至った。この解釈は文献史料、土製「祭壇」や周辺地域のレリーフなどを通して補強することができる。

砦の塔はまた、城壁の四隅に建てられていたことが分かっており、「主はわたしの砦、逃れ場、わたしの神、大砦、避けどころ、わたしの盾、救いの角、砦の塔」（詩編18・3）という記述にみられるように神の守りを表象するものでもあった。すなわち「角の祭壇」は、神の守りを表す砦の塔であり、「角」はその四隅の守りの強調で、時にそれが神の力を表す動物の角の形をとって表される場合もあったと理解することができる。

本稿の研究は、さらに対象範囲を広げることでもでき、イスラエルの宗教世界の実態を周辺地域や青銅器時代の宗教との関連で理解していく足がかりとなるといえるであろう。

二〇〇四年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

松田伝十郎による山丹交易官営化

浅見 礼文

明治一四年の政変前後に見る井上毅の政治観および教育観

井合 俊輔

第一回極東ユダヤ人会議と日本の大陸におけるユダヤ政策の

転換

磯部 国良

大木喬任と佐賀の乱

犬伏 翔

三井・三菱の財閥形成の比較について

岩本 康孝

徳川政権における琉球侵略の目的―対明外交の過程を通じて―

宇治田 剛

金解禁政策―「二大政党政治」期における経済政策―

大越 隆博

福岡藩の藩校について

大澤 佳奈

日本古代における人と鹿との関係

太田 雄介

幕末の海外情報―翻訳筆写新聞を中心に―

大橋 千裕

中世荘園西部荘の立荘

小野 貴士

織田信長の上様について

笠井 智也

新時代への靖国問題清算―合祀取り下げ訴訟から考える―

川上 泰史

平安京における河川と境

久米 舞子

石橋湛山の新自由主義

小池 太

奈良時代の奥羽連絡路の変遷

齊藤 博史

ワシントン会議海軍軍備制限問題にみる日本の国防観と外交

方針

坂谷 直亮

中野重治と転向について

櫻木 美菜

近衛文麿の政治姿勢の変化

下條 和泉

鎌倉幕府の成立と陰陽師―鎌倉幕府国家論の断章―

下村周太郎

丸山眞男における「近代」理念の特質とその展開

菅原 崇

古代日本の食文化―現代スローフードの視点から―

鈴木 舞

古代大宰府の対外的価値及びその重要性について

須藤福太郎

満州国の治安政策

關 智明

国民メディアとしての『時事新報』

高森 啓太

明治期における徴兵と民衆

伊達 信也

鈴木正三の思想における近代的・封建的側面相互の関連性

立林 悠里

―「仏法即世法」の原理について―

田中 千尋

壬申の乱と不破関

考察を通して―

田村 剛

明代久米村勢力の構成とその変化―三十六姓凋謝についての

垂水 千佳

小倉藩の御家騒動

工場法制定の背景及び過程に関する研究

塚田 雅弘

日本古代の祈雨儀礼

永田 吉範

日本古代における「赤」の様相

二瓶和佳奈

藤井健一郎

鏡と影―日本古代の文学を中心に―

星隈 貴子

は見出せるか

海津つばさ

沢柳政太郎の国際教育論に関する一考察

前田 達也

シャーワリーウツラーの改革思想におけるスーフイズムの意

前期倭寇の風俗に関する考察

松浦 武志

義

隈 奈都子

幕末の撰家

松尾 恵美

マムルーク朝カイロの繁栄と衰退

小島 昇平

薩摩藩による屋久島、平木の統制

眞邊 草平

潘金蓮から見る明代女性像

古山 愛海

引茶の基礎的考察と対中華認識との連動性

三宅 理将

前漢時代の身分制の発展と形成―皇帝の妻に見える身分―

日本外交の転換―白鳥敏夫を中心に―

山内 淳資

斉藤 康子

近世江戸の開帳について

山崎 舞

一九世紀シリア経済史―スエズ運河開通によるネットワーク

明治四年清国への留学生にみる派遣の目的―国策に積極的だ

山中 朋子

の変化を中心として―

重松 剛幸

った留学生たち―

横井 正治

エジプトの「社会主義」について

関根 仁

鎌倉府の確立過程について―公家社会の記録を題材として―

吉崎 研太

The Astrological Moment (補論:アルベルトゥス・マグヌ

「探偵化」する民衆

吉田 伸

ス『鉱物論』における鉱物と職人の類似)

高橋 厚

本居宣長と医学

伊藤紀代彦

キヤスラヴィーの青年時代とアゼルバイジャンの近代

為永 憲司

〔東洋史学専攻〕

伊藤紀代彦

中世アラブ社会における説教師―その社会的役割を中心に―

蔡培火の言語改革運動と国語教育

上杉 由希

養生―老荘思想の核心―

塚田絵里奈

沖繩における祭祀と女性の関わり

遠藤 和海

第四回十字軍とヴェネツィアの繁栄

富岡健太郎

キプロスにおける民族間の問題

大森 敬太

戦前日本語雑誌『旅』が描く中国旅行

内藤 明倫

厳復の『天演論』における思想とその生涯の明暗

奥 さやか

ネイション・オブ・イスラム台頭の背景―黒人社会の問題と

トルコの政治と宗教

小沢 創

教団の改革―

バクダード鉄道建設史

甲斐 梨緒

気候・環境の変化と楼蘭王国

中川 由郁

イラン白色革命時代

マラーシア国家形成におけるイギリス植民地支配の影響

西澤 明子

マラッカにおけるイスラーム受容において他宗教との関係性

西澤 明子

排外の力学に抗して—なぜ中国系は排斥されたのか—

西住 祐亮

サファヴィー朝成立年代の問題点

日本 孝志

移住プロセスの中で生じる教育問題—浜松の日系ブラジル人

原田 静

の不就学問題—

廣中 純

バルバリア海賊

細野 淳

クルド人の形成と反乱—シエイクⅡサイードの乱に至る過程

真鍋絵里子

とその背景—

三宅 洸

『大公報』「婦女与家庭」にみる女性の「美」—その背景と実態—

ロシア革命期における中央アジアの変動

横浜外国人居留地におけるExercises in the Yokohama Dialect

の出版背景について—一九世紀後半の中国人に代わるコミ

ユニケーション手段を提供した語学書—

グローバリゼーションとエスニックメディア—在日中国語新

聞を事例に—

安齋 智彦

レオ・フランク事件を通して見るアメリカの反ユダヤ主義

伊藤 圭

リチャード一世の治世とインフレーション—一二世紀末のイ

ングランドの考察—

司法審査制と民主主義—立憲主義と民主主義の関係としての

視角— 小熊 陽平

一八世紀フランスにおける出版文化—思想・情報の伝播と政

治への影響— 小畑 未香

フランスにおけるジャガイモの普及とその特殊性 加藤 昌子

一五世紀後半から一六世紀中葉にかけてのヴェネツィア共和

国の経済基盤の変化とその原因 鬼頭 佑介

アンテペラム期の奴隷制即時廃止論と社会思想に関する一考

察 小坂 尚弘

一九〇二〇世紀アメリカにおけるアイルランド移民の市民権

獲得 小林亜紗子

ジェントルマン—イギリスの繁栄を導く社会階層—

一八五三年アメリカ艦隊日本遠征のプッシュ要因とプル要因

一九世紀シテイのマーチャント・バンクの引受業務

イギリスに於ける宗教改革の位置づけに関する若干の考察

一四世紀ヨーロッパにおける黒死病蔓延前後の社会的・経済

的变化 坂本 会美

ヴェネツィア共和国の政体及び身分社会について 高野 淳子

カリフォルニア州における排日運動と一九二四年移民法

奴隷制度反対者と奴隷所有者という二面性—トマス・ジェフ

的変化 高野 淳子

カリフォルニア州における排日運動と一九二四年移民法

奴隷制度反対者と奴隷所有者という二面性—トマス・ジェフ

的変化 高野 淳子

カリフォルニア州における排日運動と一九二四年移民法

アソンの場合―

田中 梨絵

一九世紀フェミニズムと女子教育改革

谷井 綾

近代フランスにおける身体管理―一八世紀から一九世紀にか

船橋 麻美

けての入浴―

松浦 博英

若きヘーゲルにおける「民族宗教」とそれをめぐる問題意識

元田 まり

「男性」になった女性禁欲修道者

山田 元氣

戦後ドイツにおけるユダヤ・イスラエル関係

和田 真也

再審「初期マルクス」―若きマルクスにおける虚構とファナ

ティシズムとヒューマニズムの雑居性―

荒井 朝子

〔民族学考古学専攻〕

ビザンツ時代のシナゴーク―舗床モザイクの変遷をたどる―

磯 愛子

明治から昭和にかけての『婦人画報』における化粧品広告の

上原 明子

変遷について

武蔵野市の都市化と市民運動

大谷健太郎

サッカー漫画を漫画表現、そして主にメルロ・ポンティの身

大西 恵美

体論から分析し、そのリアリティを考える

ミノア文明における雄牛の意味について

新聞が語る考古学―朝日新聞と毎日新聞に見る考古学記事の

変遷と問題点―

岡田 匠

横浜浮世絵のモチーフにおける経年的変化の再検討―誕生か

木下 直子

スキタイ文化における金属製ハミの出現時期とその地域―黒  
海沿岸部のギリシア植民市との関わりを含めて―

近藤 優介

センナケリブ治世下におけるアッシリア帝国の対外政策につ

いて

佐藤 橘子

ノニをめぐる南太平洋の伝統と近代

白井 陽子

古バビロニア旅程記と古バビロニア時代の交易路

鈴木 良英

中世に於ける第二頸椎の拾骨に関する一考察―山口県吉母浜

遺跡およびその周辺遺跡を事例として―

辰巳 晃司

言説から読み解く近現代水俣社会史―もやい直し運動と歴史

研究との接点―

田中 多恵

墓から見るアクスム文化の背景

土田 同子

陰陽道と女房装束の相関性

永山 真由

ケルビムとフェニキア様式の象牙細工に描かれた有翼獣身像

西川 有紀

今西錦司の社会思想

西沢 徹哉

両大戦間期におけるクルドの帰属意識―六つのクルド反乱に

基づく考察―

平林 敬貢

近世芸能者の社会的地位―江戸の歌舞伎役者を軸にして

福井 裕香

古代エジプト第一王朝から第三王朝初期における王墓の変化

について―マスタバと階段ピラミッド―

藤原 史織

中央アンデス地域南部における高度差利用の多様性―プレイ

ンカ期の遺跡解釈にむけて―

町田 壮平

ヒツタイトの宗教における雄牛の位置づけ 松井 綾

歴史資料としての横浜絵葉書―『ペドラー・コレクション』

所収の絵葉書を事例に― 森 茉莉子

墓壇出土の副葬された剥片石器の選択性に関する考察―早期

末葉―前期中葉の北海道南西部出土石器を中心に―

矢島 祐介

教科書記述にみる戦中・戦後初等教育について―『初等科国

史』と『くにのあゆみ』の比較分析を中心として―

山本 卓

現代型日本住宅における居住空間の閉鎖化―日本住宅公団住

戸の開放性分析を中心に―

横山 伊織

縄文時代の北日本におけるアシカ科狩猟

吉富えりか

マヤ低地における奉納遺構・埋葬遺構の分類基準の有効性と

マヤ人の祖先信仰

吉見 智里